

サイドリーダー16冊が生み出す 全国トップレベルの英語力

伝統の中で選り抜かれた英語副読本16冊を用いて、英語の多読学習を実践している茨城県立土浦第一高等学校。「食いつかせて離さない」工夫を随所に盛り込み、圧倒的な英語力を生徒に身に付けさせる。秘伝の技を、3人の英語教諭に聞いた。

量と質の両方にこだわる サイドリーダー

公立の進学校として有数の実績を持つ茨城県立土浦第一高等学校。1997年度と2001年度には、公立で最も多くの東大合格者を出した。この進学実績を生み出し続ける一つの要因に、英語の強さがある。

英語科の森田正彦教諭は、「本校の生徒の英語力が全国トップレベルであるとすれば、それはサイドリーダーによるところが少なくない」と話す。この学校の生徒たちは、入学してから3年生の5月くらいまでに16冊の英語副読本（サイドリーダー）を読む。1冊を読むペースは1

■学校 DATA

茨城県立土浦第一高等学校

- ・所在地
茨城県土浦市真鍋4-4-2
- ・1学年の生徒数
約320人
- ・進学実績
2017年度(平成29年度)は、国公立大学合格者数が206人で、そのうち新卒は120人。東大の合格者数は20人で、そのうち新卒は11人だった。

カ月半から2カ月。

特徴の一つは、考査と密接に結び付けていること。その考査は、中間と期末の他にもあり、7月と8月と3月以外は毎月初めに実施される。サイドリーダーによる多読と月1回の考査で量と質の両方にこだわるのが土浦第一流だ。

サイドリーダーの運用は、基本的に各学年の3人の英語教諭チームに任せられている。作品のラインナップも学年で異なる。授業でも、毎回5分ほど取り上げる学年もあれば、原則扱わない学年もある。だが、試験の1週間前までに読了を前提としたレポートを課し、考査では精読を前提とした試験問題を出す点は共通する。

考査の良問が 精読の質を上げる

考査を充実させるのは、この学校の大きな特色の一つ。英語では、すべての学習活動が試験範囲となる。授業で学んだことをはじめ、自学用に課すサイドリーダーや問題集、課題のレポート

ートなどが範囲に含まれる。土子亮教諭は、考査は学習の定着を図るだけでなく、試験問題を通して「こういう勉強をしながら」というメッセージを生徒たちに送る機会でもあると語る。

この学校の英語科では、考査の前に「問題検討会議」が教諭たちの間で開かれる。作成した記述中心のテスト問題を交換して、生徒の視点をもって解き合いい、その上で批判し合ったり、改善案を提示し合ったりする。

ベテランの豊島卓教諭も、「12歳も年下」の教諭から「問うべきところはそこではない」などと厳しく批判されることが何度もあったという。しかし、そのやり取りの中で、生徒を伸ばす問題の作り方を改めて考えるきっかけを得て、精度をさらに上げることができたと振り返る。



茨城県立土浦第一高等学校
土子 亮 教諭(英語)

■表1 土浦第一高等学校の東大合格実績

入試年度	2017	2016	2015	2014	2013	2012	2011	2010	2009	2008	2007
東大合格者数	20	18	23	21	24	22	29	24	16	26	28
入試年度	2006	2005	2004	2003	2002	2001	2000	1999	1998	1997	1996
東大合格者数	21	26	29	32	33	32	31	30	27	43	32

*合格者数には既卒者の合格数も含む。
*1997年度(平成9年度)と2001年度(平成13年度)の東大合格者数は、公立高校では全国トップ(同校調べ)。

「一番大事なのは生徒にとって良い問題を作ること。遠慮せずに言い合って本当に良い問題を作れたときの方が、自分のプライドを中途半端に守るよりも喜びは大きいと知ると、教員間に信頼関係が生まれて、批判されても素直に受け入れられるようになるんです」(森田教諭)

土子教諭も、「この学校には、そう思える真剣勝負の教員がそ



茨城県立土浦第一高等学校
森田正彦 教諭(英語)

ろっています」と胸を張る。良問を作ろうと努力するほど、作問者のメッセージを感じ取る生徒が増えていく。サイドリーダーの精読の質も上がっていくという。「そんな生徒は、東大など第一希望の大学に受かっていきます」(土子教諭)とのこと。

授業でほぼ扱われないサイドリーダーなので、生徒自身の力だけではどうしても解釈できないところが出てくる。しかも、考査で内容や文脈、そして内容に対する自分の意見を厳しく問われるので、試験前になると大勢の生徒が個別に質問しようと教諭のところへ押しかける。

食いつかせて離さない サイドリーダーサバイバル

「二番大事なのは生徒にとって良い問題を作ること。遠慮せずに言い合って本当に良い問題を作れたときの方が、自分のプライドを中途半端に守るよりも喜びは大きいと知ると、教員間に信頼関係が生まれて、批判されても素直に受け入れられるようになるんです」(森田教諭)

土子教諭も、「この学校には、そう思える真剣勝負の教員がそ

ろっています」と胸を張る。良問を作ろうと努力するほど、作問者のメッセージを感じ取る生徒が増えていく。サイドリーダーの精読の質も上がっていくという。「そんな生徒は、東大など第一希望の大学に受かっていきます」(土子教諭)とのこと。

また、生徒たちの間で、サイドリーダーは「みんなが取り組んでいる」という雰囲気が出ている。出てくるかどうか、学習効果を大きく左右すること。いかに生徒をサイドリーダーに食いつかせた状態のまま維持するか。取材した3人の教諭は、サイドリーダーで最も重要なのは、「作品選びと順番だ」と口をそろえる。

この学校の歴代の英語教諭たちは、サイドリーダーの作品選びと順番に心血を注いできた。常に「もっと良い作品がないか」(豊島教諭)と探し求めつつ、長い年月をかけて選び抜いた作品を踏襲しつつも、毎回新たに3〜4冊を入れ替えていく。サイドリーダーの伝統の中で、多

くの教諭たちが試行錯誤しながらブラッシュアップしてきた努力の積み重ねに、この学校の英語の強さがあるようだ。

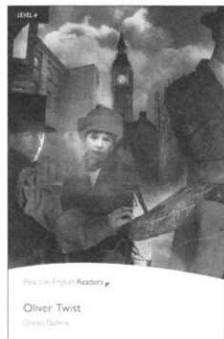
具体的な作品名や順番は独自のノウハウになるので公表できないが、そのラインナップには文学の名作だけでなく、伝記や評論、スピーチなどもある。分野も、社会科学や自然科学なども含まれていて幅広い。英語力を高めるだけでなく、抽象的な内容を理解する思考力も向上させたり、知的好奇心も育んだりしていくと、作品の難易度を上げられるとのこと。

「評論など教員が読ませたい作品もあれば、小説など生徒が読みたくなる作品もある。1年生の最初は、生徒が読んで楽しいと思える物語を使い、多読に慣れてきたところで、自然科学



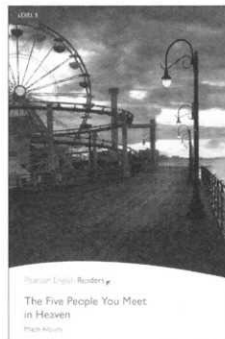
茨城県立土浦第一高等学校
豊島 卓 教諭(英語)

■採択された4冊のピアソン・イングリッシュ・リーダーズ



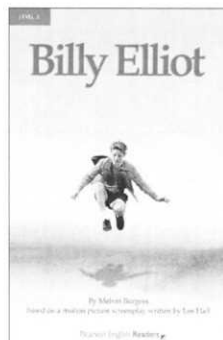
『OLIVER TWIST』

文豪チャールズ・ディケンズの代表作。難易度はレベル6。



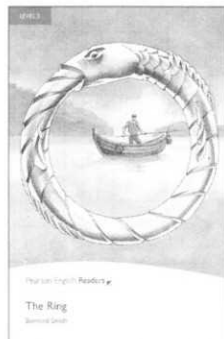
『The Five People You Meet in Heaven』

主人公の死後に始まる不思議な物語。難易度はレベル5。



『Billy Elliot』

イギリス映画『リトルダンサー』の物語。難易度はレベル3。



『The Ring』

ミステリー。難易度は、全6レベル中のレベル3。

に関わる作品や評論を入れていく。そしてまた読むのが楽しい小説を入れたりして、サイドリーダーから離れそうになった生徒をつなぎとめる」(森田教諭)といった、秘伝の技がいろいろと受け継がれているようだ。当然、英語が不得意な生徒もいる。豊島教諭は工夫の一つとして、サイドリーダーの課題レポートで、あらすじや感想を4コママンガで描かせるという試みを実践。英語が苦手な生徒でも、絵で上手に表現できることがある。秀逸なものは張り出す。すると、サイドリーダーに再び向き合う生徒も出てくる。「授業でこの絵を見せて、これを英語で説明するという活動もしたりします」と豊島教諭。

また、土子教諭は、生徒が教諭に質問をしに来ることで、「パーセントウパーソンの学び」が生じることも大きいと話す。「生徒には『分かりたい』という強い欲求があり、教員を何とか捕まえてヒントをもらい、自分たちで調べ、考え、そして『そうだったのか』と納得する。こ

のときに味わう快感が、サイドリーダーを読み進める原動力になっていくんです」

生徒を、知的に飢えさせる。いわば「サイドリーダーサバイバル」(土子教諭)。これを、生徒たちが楽しむようになれば、学習効果はさらに大きいものになっていく。

読みやすい作品と読み応えのある作品

土子教諭の学年のサイドリーダーでは、弊社を通じて「ピアソン・イングリッシュ・リーダーズ」(ピアソン刊)の4作品が採択されている。1年生の最初の段階で読む『The Ring』と『Billy Elliot』、2年生の中盤で読む『The Five People You Meet in Heaven』と、後半で読む『OLIVER TWIST』。

「1年生で読む2冊については、作品の面白さを重視して選びました。いわゆるページターナーと呼ばれる作品で、生徒がページをどんどん繰りたくなくなるような内容ですね。2年生で選んだ作品は、そのタイミングで

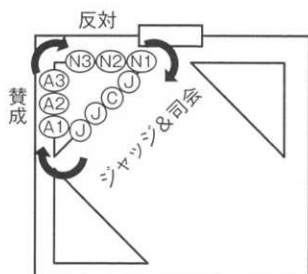
の難易度がちょうど良かったので選びました」

森田教諭の学年でも、『The Ring』が採択されている。「これはうまくリライトされていて、簡単な英語でよくここまでサスペンス感を出せるものだなと感心させられます」と評価する。

しかし、語彙や文法がレベルごとにコントロールされているリライト作品は、読みやすいゆえに、生徒の食いつきが弱くなってしまいう傾向が見られるとのこと。土子教諭は、「オリジナルの作品では、作者が生み出す言葉の組み合わせによるダイナミズムがあつて、そのゴツゴツしたところに、生徒がひかかりを覚えて食いつき、質問をしてくるようになるんです」と指摘する。

森田教諭は、リライト作品などの読みやすい作品とオリジナル作品などの読み応えのある作品とを織り交ぜる効用を指摘する。生徒の成長を見ながら「難易度の押し引き」を巧みにするところに、ラインナップ作りの勘所があるようだ。

■土浦一高式ミニ・ディベート



3～4人で1チームを組み、3チームが上図のように、教室の四隅で三角形に机を並べる。チームは、賛成(A)・反対(N)・ジャッジ(J)と司会(C)に分かれ、1ラウンド15分で討論。その後、立場を入れ替えながら3ラウンドを回す。



土浦第一高等学校のウェブサイト「動画ブログ」というページがあり、その中に生徒たちのディベートの様子を撮影した「英語ディベート紹介 (ALT ケーシー)」という動画コンテンツがある。

インプットした英語を ディベートで活用する

今、この学校では、英語のアウトプット活動にも力を入れて

いる。2010年度から、即興性重視型のパラメンタリーディベートをもとに、森田教諭が開発したという「土浦一高式ミニ・ディベート」に取り組む。生徒3～4人で1チームを作り、3チームで10人ほどの1グループを作る。1チームは「肯定」、もう1チームは「否定」、残りの1チームは「ジャッジ&司会」を担当。4グループを作った教室の四隅を使って活動すれば、1学級の生徒が4試合のディベートを同時に展開できるようにする。

「その前に、トピックに関連する五つの英語資料をALT (外国語指導助手) が用意し、それらを生徒に配布するんです。肯定的な意見が2種類、否定的な意見が2種類、折衷したものが1種類あり、生徒には一人に対して一つの資料を渡します。例えばAの資料を受け取った生徒同士でグループを作り、そこで議論して内容を深く理解し、みんなの前で説明。全グループでこれをやると、多様な知識を体系的にシェアできます。いわ

ゆる『ジグソー法』ですね。こ
うやって知識をインプットして
からディベートをするんです」
最初は「犬と猫のどちらが優
れているか」「ドラえもんはの
び太を甘やかしている」といっ
た柔らかいトピックから入り、
最後は「積極的な安楽死を合法
化する」「選挙に行くことを義
務化する」などというハードな
トピックにも挑むという。「2
年生の秋から始めますが、3年
生になると見応えのある討論を
するんです」と森田教諭。その
討論の様子が学校のウェブサイ
トに動画でアップされている。

「このディベート活動を支え
ている力は、サイドリーダーで
鍛えられたものでもあるんです。
英語特有の論理的な表現はじ
め、社会的な知識や科学的な知
識もサイドリーダーで学んでい
るからこそ、どう話せば相手に
英語で伝えられるかがつかめ
る」と森田教諭。

この学校は、スーパーグロー
バルハイスクール (SGH) の
指定校でもある。その活動の陣
頭指揮を執る豊島教諭は、サイ
ドリーダーやディベートがSG
Hの活動に良い影響を与えてい
ると話す。「生徒たちは活動の
内容を英語でプレゼンテーショ
ンしなくてはなりません。普
段の活動で身に付けてきた力を
発揮すれば、きつとうまくいく
でしょう。良いリンクが生まれ
つつあります」と豊島教諭。

森田教諭は、この学校に赴任
したころ、ある生徒に「受験英
語だけでは困ります」と言われ
たことがあるそう。その生徒は、
国際的な活動ができる医師を
目指していて、『英語をしつ
かり話せるようになりたい』と
言っていました。この学校の生
徒の多くは、大学を経て、社会
の中で英語を道具として使いな
がら何かの活動をしていくよう
になるんですね。そのことを
実感しました」

この学校の英語教諭たちは、
サイドリーダーやディベート、
SGHなど、多様な英語の活動
を通して、英語だけではな
い何か大切なものを生徒の中
で育もうとしているように見え
た。

(取材・文／宇津木聡史)